

「佐賀越の民俗誌—四万十町奥打井川～黒潮町佐賀間の古道を歩く」

楠瀬 慶太

1、はじめに

2018年8月18日、高知県四万十町の住民団体「奥四万十山の暮らし調査団」（武内文治代表）は、高知県四万十町（旧大正町）と黒潮町（旧佐賀町）で古道調査を実施した。前近代に上山郷（旧十和村・旧大正町）と呼ばれた地域と土佐湾岸地域の関わりを歴史的に研究する高知県立歴史民俗資料館の目良裕昭調査員（目良 2016）の提案を受け、約 60 年前まで使われた「佐賀越」の古道を歩いてみようというものだ¹。調査に同行してくれた四万十町奥打井川地区の古老の「佐賀まで歩いて1時間半。打井川は山の中だが、



図1 佐賀越の古道と奥打井川の地名

実は海に近い『大正の玄関口』だった」との言葉が印象的だった。自動車による移動を前提とした現在の道路交通網では、奥打井川地区は奥まった山間地というイメージだが、地蔵峠を越えれば黒潮町佐賀地域の海岸部に出ることのできる地区で、旧大正町中心部の田野々へ向かう交通の要衝でもあったようだ。

こうした古道の交通・流通の歴史は、時代の変化とともに忘れられつつある。本稿では、歴史資料から打井川の概況を確認するとともに、地図と写真を用いて古道の調査内容を報告し、聞き取り調査も踏まえた「佐賀越の民俗誌」を記してみようとするものである。

2、歴史資料に見る打井川地区

(1) 打井川の概況²

慶長 2 (1597) 年の検地台帳『長宗我部地検帳』(以下『地検帳』)には「宇津井川村・宇津井河村」、18世紀の『土佐州郡志』は「打井川村」、19世紀の『南路志』は「宇津井川村」と記載している³。明治 22 (1889) 年の明治の大合併により、22 村が合併して「東上山村」、打井川村は大字「打井川」となった。東上山村は大正 3 (1914) 年村名を改称し「大正村」、昭和 22



写真 1 奥打井川「奥組」の景観

(1947) 年に「大正町」、平成 18 (2006) 年には窪川町・大正町・十和村が合併し「四万十町」となっている。

打井川地区は旧大正町の南東部に位置し、三方を標高 500m級の稜線で囲まれ、北部を四万十川が西流する。北東は大正北ノ川・上宮、東は弘瀬、南東は黒潮町、南は四万十市、西は希ノ川、北西は上岡に接する。集落の中央を打井川(全長約 8.5km)が蛇行しながら北西に流れ、四万十川に合流する。上流から奥打井川・中打井川・口打井川の地区に分れ、高知県道(主要地方道)55号大方大正線が通り、奥打井川で分岐する高知県道(一般県道)367号住次郎佐賀線は標高 509mの「鳥打場」の裾を通り、四万十市に通じている。打井川盆踊りは町指定無形民俗文化財。大字打井川(口打井川【口】・中打井川【中】・奥打井川【奥】の3行政区)のうち、今回の調査対象となった奥打井川は最奥の集落で、下組・中谷・宮組・奥組(写真1)に区分されている。

(2) 『地検帳』に見る打井川

中近世の打井川村の状況を知る史料はなく、近世初期の『地検帳』から打井川村の土地支配の断片を読み解く。一部欠字があり確定的な数字ではないが、『地検帳』に記された田畑の土地所有者(給人)は 47 人と 3 寺となっている⁴。土地所有者として上山分・上山氏が表記され、上山氏の支配地や長宗我部氏の直轄地⁵となっている村が多い上山郷の中で、打井川村は上山氏の支配下になく 50 人近い給人(「抱」)が確認できる。彼らは苗字を持たず、所有する土地の少ない給人層であることが推察できる。このような形態の村は田野々村と打井川村のみで、上山郷では珍しい⁶。打井川村の給人には田野々村に土地を所有する者もいる。また、田野々村には高知城下など都市的機能を持つ場所に見られる「坂の者」(皮革製造や清掃などの生業に従事した職能民)が確認できる。後に紹介する田野々―打井川―佐賀をつなぐ流通の道が中世までさかのぼれるとしたら、零細に見える給人層が田畑耕作だけでなく、物資流通など経済活動に関わり、個々

に力を持った可能性もある。

土地開発では、打井川村の『地検帳』には中世の開発名主に由来する「土居屋敷」や隣接する「門田」（直営田）が確認できる。これらの地名から土佐国内の他の村々と同様、土居・門田を中心に谷水田の開発が進んだことが分かる。土佐の山間部では、『地検帳』段階でも中世名主層が村々の土地を一円支配する地域が多く確認できる。一方、打井川村では名主層による一円支配は確認できず、多数の給人が小規模な土地を支配する形態を取っている。今後、『地検帳』記載地名の現地比定を詳細に行い、当時の景観を復元することで、土地開発と分散的な土地支配の関わりを検討していきたい。

また、欠字があり確定数ではないが、『地検帳』の打井川村の屋敷数は34軒と2寺である⁷。後世の屋敷数は18世紀初頭の『南路誌』（1704-1711年）47軒、1743年の『寛保郷帳』56軒と比較すると少ない。『地検帳』で土地所有者数と屋敷数が大きくかけ離れているが、江戸前期に家数が増えたのであろうか。

『大正町史通史編』によると、江戸期の打井川村の庄屋宅は口打井川の小字「カドタ」にあり、老（おとな）役宅は奥打井川の小字「中屋敷」にあった。庄屋は長年永山氏が務め、嘉永年間以降は明治まで伊与田氏が務めている。神社棟札から「年寄」「五人組頭」などの役もあったことが分かる。

（3）打井川の宗教

近世の打井川村の動向は古文書が少なく、断片的である。『地検帳』には寺院として奥打井川にある「興泉寺」、中打井川の「カドタ」にある「吉祥庵」が確認できる。「興泉寺」は、江戸中期の『土佐州郡志』に「興善庵 禅宗」とあり、田野々村の「護松寺（五松寺）」（『地検帳』では「悟性寺」）の末寺で、宗教面でも戦国期から田野々との関わりがあったことが伺える。『大正町史資料編』によると、元は小字「寺ノ越」にあって明治8年ごろには授業場として使われていたが、現在は



写真2 奥泉庵の石像仏

小字「京殿」の道文神社境内に「奥泉庵」として移されている。庵内には木造4体、石像2体があり、石像には「享保九」（1724年）銘があり、「嘉永二」（1849年）の棟札も残っている（写真2）。「吉祥庵」については江戸期の動向は史料からは分からないが、現在の小字「カドタ」には高さ70センチほどの五輪塔3基があることから『大正町史資料編』は「吉祥庵」との関わりを指摘している。

神社については、『地検帳』に「宮ノナロ」のホノギが確認できるのみで社殿の存在は文書上確認できない。江戸期については、地誌や『大正町史資料編』記載の棟札類から当時の状況が推測できる。『南路誌』には「王子宮」（西ノ本）、「高治明神」（谷口）、「高治明神」（宮カ谷）、「道文社」が記載されている。「王子宮」は小字「西ノ奈路」にあった「皇子宮」（現在は口打井川の河内神社に合祀）に



写真3 道文神社

あたる。口打井川・奥打井川にある「河内神社」は江戸期には河内大明神と呼ばれ、『土佐州郡志』は「川

内大明神』、『南路志』には「高治明神」と記されている。「道文神社」(写真3)は江戸期には「道文権現」と呼ばれ、木造狛犬の台座銘に「嘉永六」(1853年)、棟札に「安政五」(1858年)の墨書が確認できる。

3、古道を歩く

奥打井川からキレイリ谷(ウツボノ谷⁸)沿い右側の道を経て地蔵峠に至るのが佐賀越の古道であるが、現在は林道整備などの影響で古道がほとんど残っていない。打井川は民話の里。道すがら地元の古老・本山昌文さん(1944年9月生)からさまざまな民話を聞いた。

(1) 奥打井川を歩く

奥打井川の屋号 奥打井川にはほぼ全戸に屋号(屋敷名)⁹がある。打井川上流から「新宅」「馬ハタ」「アバタ(休み宿)」「マツガダバ」「イヌダバ」「新家(シンヤ)」「カミダバ」「ドンガ」「ナラハシヘヤ」「ヤカ」「上ホリ」「中ホリ」「下ホリ」「寺ンコジ(寺ンコイ)」「中屋敷(バクチ屋敷)」「京殿」「ウエコバタ」「シタコバタ」と呼んでいる。また「ジャノ川」の奥の「ナラカシ」と呼ばれる場所にも昔は屋敷が2軒あったという。『地検帳』に記載された「大タヤシキ」「ひかしやしき」「名本ヤシキ」などの屋号は全く確認されない。江戸期に村役人の屋敷だったとされる屋敷は「イヌダバ」「中屋敷」「シタコバタ」と呼ばれている。

「シンタク」「中屋敷」「新家」などの屋敷名が見られる一方で特徴的なのは平地を表す「駄場(ダバ)」地名が多く使われている点である。他にも、小字に由来する「京殿」「寺ンコジ」「馬ハタ」「マツガダバ」、「小畠(畑)」の姓と関わりがある「ウエコバタ」「シタコバタ」があり、多様な様相を呈している。

千賀三郎衛門の話 祖父の話では、打井川の庄屋でもあった千賀(ちが)三郎左衛門は、猟師もしていてイノシシを999頭獲り終えた。1千頭を取る前に祈願のためお四国回りをしている途中、突然犬に激しく吠えられて眠たくなり、自分の鉄砲で犬を殺してしまった。その後、三郎左右衛門は足摺(土佐清水市)の手前で山賊にやられて殺され、その地元で祭られたそう。三郎左衛門の屋敷は、屋号「シタコバタ」の位置にあったとされる。

埋蔵金の話 打井川には12反の田んぼをつないだ先に小判が埋まっているという伝説があって、地元の人で埋蔵金を探し回っている人もいたが、見つかっていない。

権現の休み石 田野々村の熊野神社(熊野権現)の勧請に関する逸話のある史跡で、大正地域には上岡、小石、打井川の3カ所にある。『大正町誌』によると、建久元(1190)年11月、熊野三社の別当田辺湛増の子・永旦は、3組に分かれて3方向から熊野様を奉じて田野々村に入ったと伝わっている¹⁰。熊野浦から熊井(旧佐賀町)にしばらく滞在し、上岡村を奥に入り芳川村を経由する一行、松原(栲原町)から矢立峠を越え、小石(旧大正町小石)を経由する一行、熊井から地蔵峠を越えて打井川を経由する一行の3組である。それぞれに一行が休んだという権現の休み石があって、伝承が残っている。打井川の休石は旧道側の大石で、側に榊が植えてあったが、県道整備で旧道下の県道側に落下移動させたという。現在も県道沿いに大石があり(写真4)、看板には「この石の上にあがるとにわか大雨になる」と伝えられることから「雨降り石」と呼ばれること、「横に生えて



写真4 権現の休み石と榊

いる榊は、(熊野権現) 一行の中の一人が杖にしたものをおき忘れ、それが根付いたもの」と記されている。

道文神社 奥打井川にある南北朝期の尊良親王家臣・秦道文を祭った神社(写真3)。神社の看板や『大正町誌』によると、南北朝期の1331年に起きた「元弘の乱」で鎌倉幕府の執権・北条高時によって土佐へ流された尊良親王は、家臣の秦武文・道文を伴い、旧大方町有井川に住んだ。道文は親王の命を受けて京都に行く途中、打井川小畑で病気になって亡くなったと伝わる。「道文様」の祭りは幡多・窪川地域からも参拝客が訪れる祭りで、『大正町誌』は佐賀方面からは「地蔵峠」、旧大方町の入野・上川口方面からは「伴太郎坂」、旧窪川町の窪川・仁井田方面は家地川から「寺の越坂」、旧大正町の北ノ川方面からは四万十川を渡り「カイガヤシ坂」をそれぞれ越えて大勢の参拝客があったと記している。奥打井川と他地域との交通がよく分かる事例である。

塩の宿 『大正町誌』によると、四万十町大正(田野々)の熊野神社の秋大祭(11月12日)では、清浄人(しょうじょうど)と呼ばれる者が正副2人選ばれ、祭礼に関するご供物の一切をつかさどった。彼らは、祭礼の3日前から水垢離(みずごり)を取り(水行を行い)清祓いをして身を清めてから奉仕する。祭りで清めに使われたのが、旧佐賀町熊野浦から汲んできた「潮水」である。本山さんによると、熊野浦へ塩汲み(潮汲み)に行く者は、正副2人連れで¹¹、11月9日に田野々を



写真5 現在は無住の「塩の宿」

出立し、打井川の渡しで四万十川を渡り、奥打井川から佐賀越の道を歩いて、熊井を経て佐賀の「熊乃屋」で1泊する。「熊乃屋」は大正地域の人たちがよく使う宿だったらしい。10日に熊野浦で潮水を汲んで担いで再び佐賀越の道を通り、奥打井川に到着するとアバジイの家(屋号「アバタ(休み宿)」)(写真5)で1泊し、11日に田野々へ向かった。『大正町史資料編』は、塩の宿に宿泊した際、庭の入口に特別に作った棚の上に潮汲みの竹筒を安置し、夜は「塩迎え」「さか迎え」と称して隣近所が集まって酒盛りをしたことが記載されている。アバジイとは秋田シゲキさんのことで¹²、97歳まで生きたが、病気のほとんどない人だった。潮汲みに行く者は必ず帰りにアバジイの家に泊まる習慣があった。潮汲みはいつごろか徒歩から車に変わり現在は行われていないという。アバジイの家は現在空き屋になっているが、「塩の宿、郷社熊野神社 清浄人の宿」と書かれた石柱が立てられている(写真6)。



写真6 塩の宿の石柱

三宝山(さんぼうさん) 屋号「馬ハタ」の裏山(写真7)。山頂に「三宝大荒神」の祠があったが、現在は河内神社に移している。祭神は大歳御年神(おうとしみのしのかみ)。昔は奥打井川の家々が集まる秋祭りで、余興で相撲を取っていた。



写真7 右上の山が「三宝山」

材木搬出 戦前までは、材木（丸太）は河内神社下の打井川までは谷を堰留めて水で流し、その後は陸に上げて馬車で打井川口まで出した。そこからは四万十川をイカダで流していたそうだ。山では木炭ガスで移動製材をする人もいた。

生業 打井川の生業は、米・炭・硝煙・シイタケ。ミツマタは作っていなかった。シイタケは愛媛から商人が買いに来ていた。戦後はあちこちにイモ畑があり、カライモを供出した。キビ飯も良く食べた。白米は祭りの時などしか食べられなかった。

（２）佐賀越の古道を歩く

峠道 佐賀港は大阪方面との物流拠点になっており、熊井を経由して市野々から大正方面へ向かう山道（佐賀越えの古道）は「大赤線」。大曲りもせず1本道で、佐賀についた大阪からの荷物を積んだ馬や牛がぎゅちり通っていた。「ニナ」などの貝を佐賀の浜へ取りに行くこともあった。登り口付近の道は残っているが（写真8）、頂上までの道はほとんど残っていない（写真9）。頂上は平場になっており（写真12）、峠は地藏峠（首なしの「しゅむか地藏」のある峠）と呼ばれる。佐賀方面への降り口は、市野々を通る道と伊与喜に降りる道と2つがあった。打井川から佐賀への道はジャノ川を登りきった野重峠越え（ノジュウトウ、馬之助の生まれたあたり）もある。



写真8 地藏峠へ向かう佐賀越古道の登り口



写真9 道は草に覆われて断片的に残存

御神輿の話 打井川の河内神社の御神輿も、打井川の住民が佐賀から船に乗り、大阪を経由して京都で購入し、佐賀越の道で持ってきたものだという。一行（3人）は大阪の宿で泊まったが、宿代が安かったので大酒を飲んだらお金が足りなくなり、御輿の金が払えなくなった。そこで、部落の人がお金を出し合って御輿代の借金を返したという話がある。

炭俵6つ 打井川から佐賀へと搬出したものとして木炭があった。本山さんの父は白炭を作っていたが、後に黒炭に変わった。炭俵6つを担って佐賀まで歩いて持っていった。地藏峠から市野々までは約1キロだった。奥打井川から歩いて1時間半ほどで到着した。

しゅむか地藏 佐賀越の道の頂上付近（大正と佐賀の堺付近、宇佐賀越・地藏山）の平地から少し上がった高所に石製のお堂があり、石の地藏が4体置かれ



写真10 しゅむか地藏

ている（写真 10）。右から2つ目の小さな地蔵が「しゅむか地蔵」で、昔は首がなかったが、「かわいそう」とのことで地元の人が首を乗せた。『大正町史資料編』には、首なし地蔵に地元の腕白小僧が「しゅむか、しゅむか」と小便をひり掛けて遊んだことから、「しゅむか地蔵」と名付けられたとある。

幻の道舗装 佐賀越の道は、打井川の人には儲けになるが、佐賀の人には儲けにならない道。道を舗装する話が持ち上がったが、佐賀町長は「いらん」と言って舗装化は実現しなかったという（写真 11）。

嫁入り 打井川から佐賀へ嫁に行った人は多い。鳥打場を経由して上川口へ出る道もあった。上川口にも嫁は行っていた。嫁は打井川に来るよりも佐賀へ行く方が多かった。

行商人 上川口や伊田、佐賀から佐賀越えの道を越えて行商人が来た。魚を担ってきて、大正に入っても奥になれば生魚は販売せず、塩サバなどを売っていた。打井川ではカツオやブリ、クジラなどが販売され、新鮮な青物が食べられた。伊田のおばあさんは漁港で上がったブリを丸々担って行商人に来ていた。峠道には馬を使う運搬屋「セグリヤ」もいた。

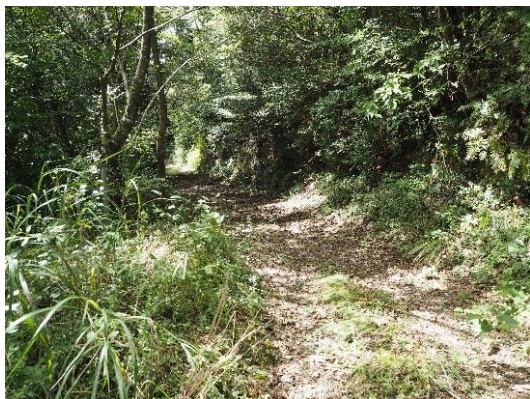


写真 11 佐賀へ向かう古道



写真 12 地蔵峠がある平場

（3）佐賀への道

熊井の鍛冶屋 打井川には鍛冶屋がなく、佐賀へ行くときに旧佐賀町熊井（写真 13）の鍛冶屋によく寄っていた。田野々に行くより熊井に行く方が近い。春先には、皆が牛グワや鋤クワの修理、クワの打ち直しにいった。行きがけに熊井で鍛冶屋に預けて佐賀へ行き、帰りにもらっていくこともあった。鍛冶屋（現在育苗ハウスがあるあたりにあった）は高橋さんという元々大方町鞭にいた人がやっていた。道文神社の祭りには熊井からも市野々を越えて行った。また、熊井には田辺氏に由来を持つ熊野神社がある（写真 14）。



写真 13 熊井集落



写真 14 熊野神社

佐賀・熊野浦 佐賀の町には現在は閉まっているが大正地域の人々がよく使った宿屋「熊乃屋」の建物(写真15)、熊野浦には「田辺湛増上陸の地」(写真16)や田辺湛増の水飲み場(写真17)、中世のものと思われる石仏(写真18)などの史跡が残る。熊野神社の潮汲みが行われた海岸の岩場(写真19)も確認できた。海岸沿いを歩けば、佐賀から熊井浦は近い。熊野神社の潮汲みや勧請の伝承から、大正と佐賀・熊野浦とのつながりを実感できた。



写真15 熊乃屋跡



写真16 田辺湛増上陸地の碑(左)



写真17 田辺湛増の水飲み場



写真18 中世石像仏

4、峠道と海山経済圏

聞き取り調査や現地踏査の結果、佐賀越の古道は約60年前まで田野々—打井川—市野々(伊与喜)—熊井—佐賀—熊野浦をつなぐルートで盛んに利用されていた。古道は、人・牛・馬が行き交う往還として機能し、米や炭、魚などさまざまな物資が往来していた。中でも「打井川」「熊井」はその中継点となる場所にあり、大正・佐賀の玄関口としての機能を果たしていた。そして古道は佐賀港を経由して大



写真19 熊野神社の潮汲みが行われた海岸の岩場

阪・京都などの畿内方面とつながっていた「流通の道」であったことも確認できた。

古道の起源は、江戸期の地誌にも記された田辺湛増・永且や熊野権現勧請の伝承から平安末期までさかのぼる可能性がある。また、南北朝期の尊良親王の家臣・秦道文をまつる道文神社の伝承も存在し、中世の伊与木郷と上山郷をつなぐ「地蔵峠」の重要性が浮かび上がってくる。いずれも源平や南北朝の内乱に付随する中央氏族や貴族の土佐潜伏の際に使われた「軍事の道」であったことも伺える。近世初期の『地検帳』では古道の存在を確認できないが、田野々・打井川の複数給人による特殊な土地支配形態から、一般農村でなく交通流通拠点としての役割を果たした地域である可能性も指摘した。古道を通した佐賀一大正間の交通・流通面での関わりは近世以降も続き、道文神社の祭りや熊野神社の潮汲みなど「信仰の道」としても継続されたことが分かった。

中世史家の服部英雄氏は、全国の歴史的な峠道の性格を「流通」「軍事」「信仰」の3つの道に区分して分析している（服部 2007）。「流通の道」は消費地と生産地を結ぶ牛の道、「軍事拠点」は軍事拠点と前線・緊迫地を結ぶ馬の道、「信仰の道」は人の足のみの道と分類しながらも、それぞれの相互性・共通性を指摘している。このような整理に従えば、佐賀越の古道も3つの性格を持った歴史的な峠道であることが確認できる。また、この古道は陸上の道だけでなく海上の道とつながり、古来から土佐の山村社会を畿内などの中央と結びつけていたといえよう。

打井川地区には、2010年オープン「海洋堂ホビー館四万十」、2012年オープン「海洋堂かっぱ館」があり、そのキャッチフレーズになった「辺鄙（へんぴ）な」地域として認識されている。しかし、佐賀越の古道の歴史を読み解くと、打井川地区が決して便の悪い、田舎の地区ではなかったことが分かり、打井川の隠れた地域像が明らかになった。すなわち、エネルギー革命以前の社会では、高知県中東部の物部川流域で示した川の道（舟運）を通して山村—農村—町—都市が相互補完的に機能する「流域経済圏」（楠瀬 2009）とは異なる、佐賀越の古道（峠道）を介して山村—農村—海村—都市がつながる「海山経済圏」とも言える経済流通圏が機能していたことが想定できる（図2）。このような経済史的視点で、舗装された道

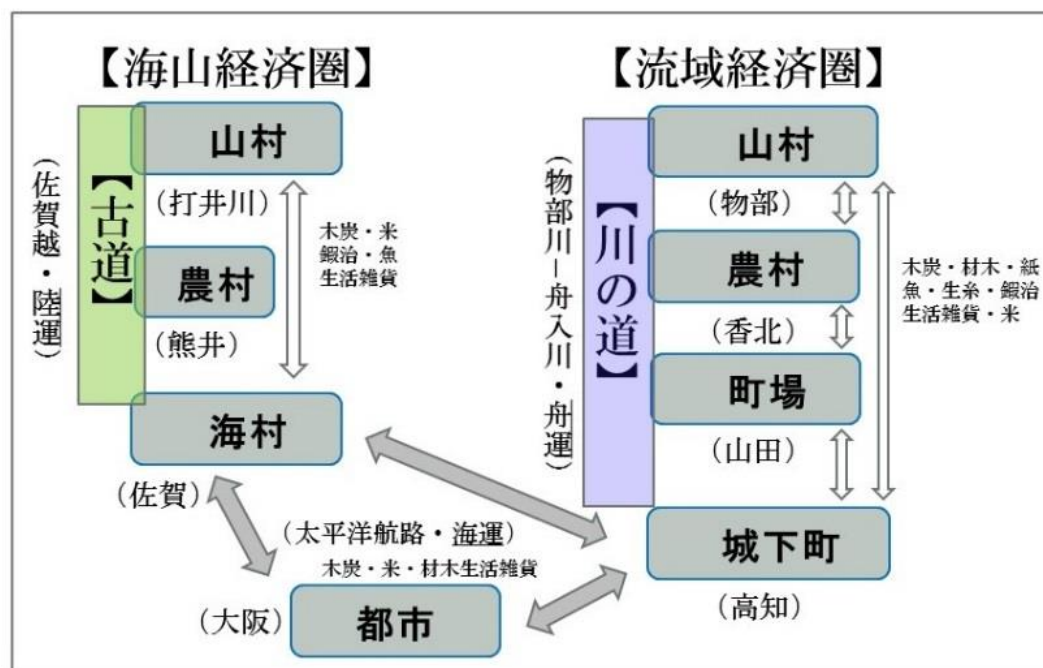


図2 高知県における海山経済圏と流域経済圏の模式図

路や鉄道などの交通網が整備されていなかった社会について、峠道が地域社会の維持・発展に果たした役割を改めて検証していかなければいけない。

5、おわりに

古道が使用されなくなってから 60 年、古道の痕跡はほとんど残っておらず、その歴史を知る人も少なくなっているのは残念なことだ。「奥四万十山の暮らし調査団」では、今後熊野神社の大祭で行われた潮汲みを佐賀越を使って再現する計画を立てている。潮汲みの再現には、古老への聞き取りでその経路や作法などをもう少し深く調査する必要がある。

そこで、集落の歴史文化を地域づくりに活かす「地域再生の歴史学」(楠瀬 2013) の 3 段階プロセス(「記録」→「掘り起こし」→「普及」)から今後の取り組みを探ってみたい。まず①本稿で説明してきた調査研究による潮汲みや佐賀越の歴史民俗を「記録」する活動を行う。次に②潮汲みの再現を行い、住民にその歴史の価値を再認識してもらう「掘り起こし」の活動を行う。最後に③住民を巻き込んで佐賀越の道を歩くツアーや潮汲みの再現を行う「普及」の段階へと活動を進めたい。

高知県内でも香美市・香南市の「塩の道」(保存会)や高知市から嶺北地域へ至る参勤交代道「北山道」(5市町連携の北山道保存協議会)など各地で地域をまたいだ古道を活用した活動が行われている。「佐賀越」もこのような形で活用が進めば、歴史資源としての古道を活かした地域振興や四万十町と黒潮町の地域間連携の可能性も模索できるのではないかと考えている。

【註】

- 1 調査には本山昌文を案内役に武内文治、目良裕昭、林瑞穂、田辺唯夫、楠瀬慶太ら 7 人が参加した。
- 2 打井川地区については、HP「四万十町地名辞典」(<https://www.shimanto-chimei.com/>ア行・あいうえお/打井川)に詳しい。2016 年 3 月に武内・楠瀬が行った聞き取り調査の成果も反映している。概況はHPと『大正町史 資料編』を参考にまとめた。
- 3 地区内の江戸期の墓に刻まれた姓は「宇津井」から「討井」に変わり、明治になって今の「打井」になっている(多賀編 1989)。
- 4 検地順に見ると【奥】「助次良」「舟右衛門」「次良太良」「勘介」「小右衛門」「若右衛門」「次郎大良」「蔵介」「次良太郎」「太良三郎」「興泉庵(寺)」「源七」「与次良」「九良次郎」「四良次郎」「藤左衛門」「与五」「新次郎」「市兵衛」「衛門次郎」「助次郎」「左馬助」「蔵進」「甚衛門」「新三郎」「新衛門」「助左衛門」「鍛冶藤左衛門」【中】「五十良」「権左衛門」「清左衛門」「小次良」「弥左衛門」「弥次良」「源五良」「彦七」「吉祥庵」「三良次良」「吉衛門」「次良五良」【口】「口楽寺」「彦五良」「式衛門」「与太良」「万次良」「蔵丞」「与二良」「弥八口口」「弥七」「藤五良」となる。
- 5 関田英里氏の『地検帳』の解説によれば『某分』とされているものについては旧領の由緒を示すだけであって実際は長宗我部氏の直轄地となり、作職を登録されたものか、直接支配を受けたものでないかも想像される」としており、『大正町史通史編』もこの説を踏襲している。
- 6 『大正町史通史編』もこの点に注目する。田野々と宇津井川村では「抱」地が多いことから、「抱」は「公領(長宗我部直轄地)における保有地または野だのまま所有する場合、山分の各地にこの称が多く見受けられる」との横川末吉氏の研究(横川 1961)を引き「直轄地における保有形態」だとしている。
- 7 検地順に見ると、【奥】は「助次良」(シヤノ川新開)「若右衛門」(ヒキカクシノ北ミソノ上)「若右衛門」(大タヤシキ)「次良大良」(ひかしやしき)「勘介」(名本ヤシキ)「太良三良」(ヲモヤノ南)「与五良」(口口北ノウエ)「小衛門」(口口西上)「衛門次良」(口口にし)「甚衛門」(ナロカイチノ上)「助左衛門」(ナロ川ノをく)など 15 軒と「興泉寺」の 1 寺、【中】は「助左衛門」(クロヲ北ノ下)「清左衛門」(クロヲノ北新開)「権左衛門」(ムカイクロヲノウエ)「三良次良」(中小や谷ノウエ)「弥次郎」(ハキノナロ)「小次良」(はかわらひひかしのうへ)「弥左衛門」(はかわらひノ北)「介五良」(のほりくも)「ふな右衛門」(なもとやしき)「平衛門」(吉祥庵寺中北ノウエ)「源五良」(西モト)「兵衛」(西モト西)「彦七」(口口にしのうへ)「新次郎」(井ノ谷ノ下)「吉衛門」(口口ノ下)など 13 軒と「吉祥庵」の 1 寺、

【口】は「与二良」(□□□)「藤五良」(□□□)「彦五良」(□□□)「弥次良」(□□□)など6軒が確認できる。

⁸ 馬ノ助神社の「馬ノ助」が遊んだ谷。ウツボを獲って食べたと伝わる。

⁹ 土佐の山村屋号については楠瀬 2018 を参照。

¹⁰ 『南路志』田野々村の「古城記」には「熊野三所権現ハ、本伊与木郷熊野に御船着岸して、右社跡有。夫を上山郷田野々へ勧請し玉ふ由。杉の木を則神体とせよとあるよし」とある。

¹¹ 清浄人の2人と、潮汲みに佐賀へ行く2人が同一かは確認できていない。

¹² 『大正町誌』486頁、『大正町史資料編』39頁には、秋田繁保宅とある。

【参考文献】

伊与木定 1984 『上山郷(昔の大正邑)のいろいろ搔き暑めの記』

楠瀬慶太 2009 「限界集落化の歴史的プロセスに見る山村の未来」『政策経営研究』2009-vol.1

楠瀬慶太 2013 「地域再生の歴史学」『地方史活動の再構築』雄山閣

楠瀬慶太 2018 「土佐山村の屋号研究試論」『高知大國文』49

大正町誌編纂委員会 1970 『大正町誌』

大正町史編集会議委員会 2006 『大正町史通史編』

大正町史編集会議委員会 2006 『大正町史資料編』

多賀一造編 1989 『大正のむかし話』大正町教育委員会

服部英雄 2007 『峠の歴史学』朝日新聞社

目良裕昭 2016 「『黒潮沿海文化』の視点からみた上山郷」沿海文化研究会・黒潮町報告レジュメ

横川末吉 1961 『長宗我部地検帳の研究』